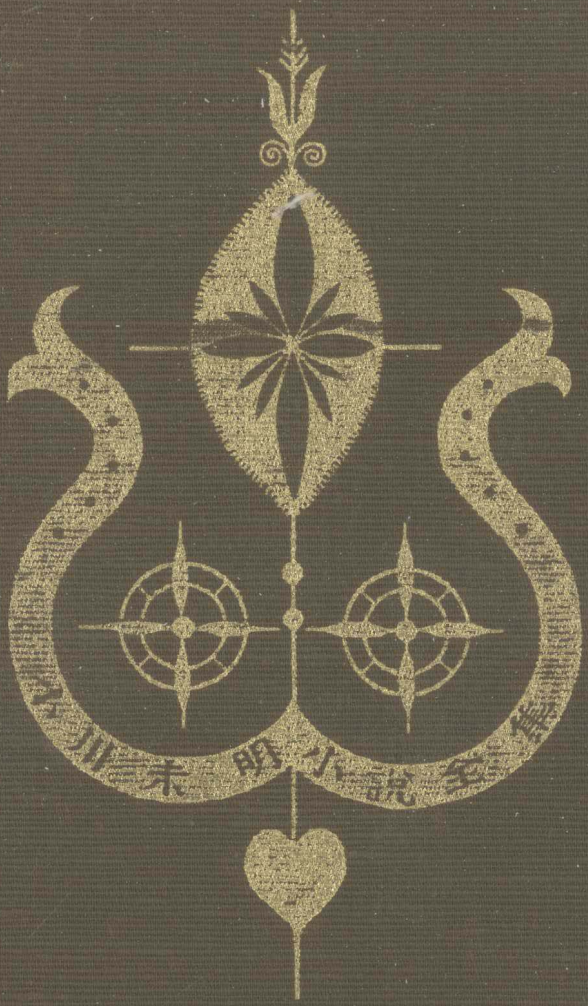
谷川未明小說全集

定本

小川未明小説全集

6

評論・感想集

定本 小川未明小説全集 6

評論・感想集

昭和54年10月6日　第1刷発行

著者　小川未明
発行者　野間省一
発行所　株式会社　講談社
東京都文京区音羽2―12―21
郵便番号　112
電話　東京（03）945―1111
振替　東京8―3930
印刷所　廣済堂印刷株式会社
双美印刷株式会社
製本所　島田製本株式会社
定価　3500円

©岡上鈴江　1979　Printed in Japan
落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。（児一）

0393-448260-2253　(0)

定本小川未明小説全集 6

評論・感想集

目次

初期浪漫主義時代、『描寫の心得』から……11
二葉亭氏……11
新しき紋景……14
晩春、初夏とロマンチシスト……18
羞恥を感ず……22
北國の鴉より……25
最近の感想……28
夜の喜び……30
なんで生きてゐるか……33
少年主人公の文學……35
單調の與ふる魔力……38
盲目の喜び……40
北國の雪と女と……43
書齋と創作の氣分……48
刹那に起り來る色と

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

官能と、思想の印象……52
何故に苦しき人々を描く乎……53
零落と幼年思慕……55
余も又 Sommambulist である……58
日本海の歌……62
純朴美と感興……64
神經で描かんとする自然……67
單純な詩形を思ふ……69
日の當る室から……72
上京當時の回想……74
作家として立つに
就いての三つの質問……81
話のない人……84
抒情文と敍景文……89
文學上の態度、描寫、主觀……101
文學に志す人々の用意……115

社會主義時代……131
書齋より……131
死に生れる藝術……134
我が感想……136
何故に享樂し得ざるか……139
最近の日記……142
今は亡き子供と……147
書齋での對話……150
私の試みる小說の文體……152
菩提樹の花……154
お伽文學に就て……156
少年文學に對する感想……159
ある人に與ふ……162
現實生活の詩的調和……164
過去の一切は失れたり……167

戰爭に對する感想……172
本然的の運動……177
プロレタリヤの正義、藝術……180
鬪爭を離れて正義なし……183
童話に對する所見……187
勞働祭に感ず……189
死の凝視によつて私の生は跳躍す……191
其の雄勁とさびしさ……195
藝術の暗示と恐怖……199
救ひは藝術にある……202
藝術に箇條なし……204
子供は虐待に默從す……207
母性の神祕……211
私達は自然に背く……214
私をいぢらしさうに見た母……215
眞夜中カーヴを軋る電車の音……218

冬から春への北國と夢魔的魅力……223
作者の感想……227
無窮と死へ……230
成熟期……233
私が童話を書く時の心持……233
僧房の菊花と霜に傷む菊花……236
田舎の秋、高山の秋……239
私を憂鬱ならしむ……242
風の烈しい日の記憶……247
雪を碎く……252
生活から觀たる田園と都市……259
鄉土藝術雜感……265
治安維持法案の反道德的個條……268
ある日の記……271
少年時代の正義心……275

理想の世界……279
事實と感想……280
人道主義を思ふ……283
新ロマンチシズムの轉向……287
新興童話の强壓と解放……298
少年時代禮讚……301
越後春日山……304
女性に精神的協力なき現象……307
新文藝の自由性と起點……310
兒童文學の動向……314
童話創作の態度……318
愛なき者の冒瀆……324
自由な立場からの感想……327
花の咲くころ……331
作品また果實の如し……334
雪……336

ふるさと、小鳥……339
石と雲と蜂……344
冬の空……348
先達たるもの……351
戦後篇……353
現下の所感……353
人生案内……355
わが母を思う……362
詩篇……364
解説……山室　静……373
年譜……岡上鈴江……382
著作解題……編集部……400
作品年表……紅野敏郎……450
装丁　武井武雄

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

定本 小川未明小説全集 第六巻

評論・感想集

一、初期浪漫主義時代、『描寫の心得』から

二葉亭氏

△私は一度も二葉亭氏に遇つたことがない。たゞ飜譯や作物を通じて感じたことをいふ。氏は激しい感情家であつた。而して淋しみの人であつた。文藝を排して直ちに人生を見んとした人――けれど其人は詩人であつたと思ふ。平民的な詩人であつた。自由を喜び階級を嫌ふ。何處にか野趣汪溢とした革命的の風趣があると共に一面に於て神經質的なセンチメンタルの分子もある。

△明治初年に出た憂國の志士に類した獻身的、犧牲的な精神も見えるが、又現時ロシヤに於ける革命家の如き進んだ人生の目的といふ考へもある。何にしても、革命時代の精神を代表してゐる。たゞ其の生れた國が日本でなかつたら、其の文學に關しても、若しくは政治的方面に於ても大に氏の志が達せられたことであらう。私は、氏を露西亞に出させたかつた。然らずんば支那でもいゝ。

△如何なる天才も時によつては習俗や周圍の關係に束縛せられる。半生の苦鬪――社會及び自己に對する不滿――其等が原因となつて外に發する勢が自然内に籠つて内省的となるものだ。生れつきパッショネートな詩人も、時に幽鬱な詩人となることがある。二葉亭氏は大なる自己革命家の一人である。決して周圍に捕はれるやうなことはなく、自由に自分の思ふ儘をやつた人だらう。しかし、氏の作品には餘程、センチメンタルな分子を含んでゐる。氏の批評、若しくは爲人と大に違つた處があ

る。晩年奮然蹶起して露西亞へ行かれたのは（今から見れば行かれない方がよかつたが）流石に氏が偉い人だといふことが分る。

△氏は創作よりも飜譯に力が籠つてゐる。其も其筈だと思ふ。氏の性格は寧ろ彼のゴルキーの作篇にあるヒーローや、ツルゲネフの中に出るやうな革命的な人であつた。氏は文藝品として是等の作を飜譯したといふよりも、自分の精神や、鄕土や、人格を是等の中に見出さんとした結果からであらうと思ふ。だから氏の飜譯には自分の全力が入つた筈だ。單なる藝術品でなく人生其物の姿を其によつて示さんとしたのである。自家の見識と作中の主人公に同感するの餘りになつた飜譯だから、時によつては原作以上二葉亭氏の匂ひが加はつて更に痛切なものとなつてゐるかも知れぬ。

△平凡な日本は餘りに二葉亭氏のやうな英雄が舞臺とするには淺薄である。一言にすれば明に過ぎる。底が見える。二葉亭氏が日本を舞臺に小說を書かんより、背景、人物共に備つてゐる露西亞の作品から自己の型を見出したのは當然のことである。其故に私は、二葉亭氏の飜譯を單に飜譯として見ない。

△氏は文藝を排して、直に人生を見んとした人。氏の飜譯には氏の感情や、志士的な分子や、幽憤感慨の氣が、何處ともなく潛んでゐる。溢れてゐる。私が氏の飜譯、及び作品を通じて見た二葉亭氏は、實に悲壯な感のする人である。幽鬱、厭世な人である。淋しみの人である。

△氏はまた流浪の人である——處こそ常に換へてゐなかつたが、常に何物かをロンギングしてゐた。大なる現實家であると共に大なるロマンチシストである。日本の鄕土は決して氏の鄕土でなかつた。此の意味に於て氏はコスモポリタニズムの人である。氏は常に思ひを暗いロシヤの彼方に走せてゐた。而してゴルキー作中の漂浪者のやうに靈魂は彼地を流浪してゐた。要するに氏は流浪者の一人である。

△氏の爲人を思ふに氏は決して皮相な文明の頌歌者でなかつた。原始的の眞率な考へを持てゐた。氏は赤誠の人である。氏は決して智識的の人でない。作品を通じて暗默なる自然力——地上に生存する人生の——歸趨に就て考へた。誰人も氏の作品に接して、悲壯の感と此の眞率なる原始的の感を抱かないものがあらうか。氏が虛僞と虛飾でなつた人爲的宗教を排して、自己の感情に信仰の

根柢を置たのは是がためである。

△氏の人生觀は理窟から入らずに感情から入つてゐる。氏の感情には人生の苦みや甘みがある。だから氏の感情は、卽ち人生を批評してゐる。科學的に人生を見ず、直覺的に人生に觸れてゐるやうだ。氏の感情には之がため力がある。やはり氏は詩人にして豫言者である。而して人生の批評家だといつた方が當然だ。けれど氏の人生觀は偏してゐる。要するに流浪者の人生觀である。

△思ふに氏は燃ゆるやうな感情を人生の悲しみ、經驗の苦みで掩うてゐる。だから氏の感情が心熱的で熱度の强い所以である。同時に氏は理想家であつた。（理想といふことは、目的があるといふ意味で。）氏は非常にイマジナチーブの人であつた。だから、人生と文藝との間に一皮あるのは、氏にとつて生溫くて堪へられなかつたことだらう。直ちに人生を見んとした。是れ身を挺して活天地に投じ、萬里の濤を蹴つた所以である。考へれば悲壯の極みだ。

△けれど「其面影」や「平凡」などを見ると、いかにも人情の厚い人といふことが分る。幾分か是がため思ひ切たことが出來ず、極端に感情を露骨に出し得なかつた處があらう。氏は飽迄實行を重じた人である。だからアート、フォア、アートに隱れることが出來ず、文藝に慰安を求め、宗教に寄ることが出來ず、赤裸々なる現實に立脚して人生を見んとした。是れ一層氏に苦鬪の多かつた所以である。此點は飽迄露西亞式だ。氏が實感を重じた所以も此處にある。けれど氏の偉なる處、同時に現實に捕はれなかつた。人生久遠の目的――卽ち理想家としての精神上の苦しみも一倍多かつた。氏が遂に懷疑家の域を脫せずして一生を終つたのは、氏にとつては苦しいことであつたけれど、それだけ吾等は氏の爲人を痛切に感じ、悲壯感慨の念に打たれる。氏は淋しみの人であつた。長へに悲壯なる文豪よ！　筆を止めて私の眼は涙にみちた。

――明治四十二年六月三日――

新しき敍景

敍景には觀察が主要の部分をなして居る。然して觀察の要務は、今まで見得なかつた新しいことを見出すのにある。そればかりではない、昨日までも感じ得なかつた新しい意味を惹き出して來ることが大事である。言ひ換へれば常に新しく見ることだ。其所に二つの意味がある。一は單に新しく鮮かに見ることで、卽ち眼が自然界に慣れずに、又汚されずに生れた儘のやはらかさで此の世界を見ると云ふやうな意味と、今一つは、內實した經驗及び智識、所謂全人格的の努力を以て見ると云ふ此の二つの意味がある。鮮かに見、美しく見ると云ふことは可憐な抒情的なものであつて、所謂優し味と、懷し味とを持つたゆつたりした心持である。愉悅、歡喜の氣持を以て見る、それは幼兒が初めて物を見得た時の如く、動物が生れて初めて眼の皮が破れて、此の世の輝かしい光りを見た時の氣持、昔からロマンチシストの驚きで物を見る態度だ。恰度、晩春初夏の候に香はしい草木の葉に滑らかな日の光りが流れて居る。それを見る時その一枚の葉に流れて居る纖維の一條も見逃さず、又香はしい匂ひの籠つて居る空氣——匂い、それ等も聞き落すことなく、又日の光りの滲んで居る戰く輝きをも見落すことなく、總べての官能が自然界に對してぴつたり合つて、自分の氣持と自然の氣持とが溶け合つて了ふ所に至るものを云ふのである。全人格的を以て見る場合にはその餘裕がない。たゞその時の氣持——神經が過敏に活らいて居れば、神經のみでそれを見て行く。不安の情緒が搖めいて居ればその不安の情緒で直ちにそれを見て行く。所で此の場合斯う云ふことが作者に豫想される。此の敍景その物を單に作品の背景にするに過ぎないと云ふ觀念は些つともない。昔の小說にあつたやうに一貫して居る氣分が出れば好いとか、若しくはその思想なり、主張なり、事件なりが現はれゝば好いと云ふやうな場合の如く、敍景そのものは瑣末な枝葉に過ぎないと云ふやうな考へは少しもない。些つとした敍景その物にも、作者は全人格を樹てゝ動いて行かなければならぬ。だから最近

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com